The usage of whom may have been transformed by youth, whom of which had little but not zero input of it

規範の継承から見る新奇逸脱用法

吉川 正人

1. はじめに

近年，インターネット上の英語を中心に，whom of which という新たな関係代名詞の使用が増加している．この新奇性は本来 who(m) が用いられる場面で不要と思われる of which が追加されている点にある．先行研究 (Evile & Pesetsky 2023) では of の無い whom which など様々なバリエーションの存在や一定の規則性の存在が指摘されており，その生起頻度を鑑みても，偶発的なエラーとは考えにくい．本稿では，この whom of which という関係代名詞の新奇逸脱用法の出現を，いくつかのデータを用いて「規範継承の失敗」および「新たな規範の創発」という観点から考察する．なお本稿における「規範」とは，所謂「正用法」として一般に認識されているものに限定されない，文法的な規則やパターン全般を指す概念である．

2. Whom of which の特徴

ここではまず分析の対象となる whom of which の特徴を確認する．実例を以下に示す (Evile & Pesetsky 2023: 2-4):

(1) a. The snowmen **whom (of) which** the children loved went on a vacation to Hawaii.
b. God bless everyone **whom of which** has donated.
c. During your discussion, you guys emphasized the detriment of being a bastard in OT. Aegon the Conqueror was based on William the Conqueror, **whom of which** was a bastard.
e. […], then you lower your standards by asking the guy **whom which** you turned down 3 times that night to dance.

(1a) は作例，(1b-e) はウェブ上で採集された実例である．先行詞は一般名詞・代名詞・固有名詞いずれも許容され，制限用法・非制限用法，主格・目的格用法の存在が確認でき，who と同様の分布をもつことが伺える．

Evile & Pesetsky (2023) によれば， whom of which は以下の特徴を持つ:

a 先行詞は who(m) 同様にヒト ([+human]) である　　b. 容認度に明白な世代差がある
c. of の無い whom which, of 以外の前置詞が用いられる whom with which, whom to which, whom 以外の関係詞が現れる where of which, when of which, あるいは where in which といった多数のバリエーションが観察される
d. 基本的にはカジュアルな談話で用いられ，ソーシャルメディア上で容易に実例が見つかる

c の特徴から，Evile & Pesetsky (2023) では *wh*-which 関係詞という総称を用い，その全体を分析対象としている．

加えて，Q&A サイトやブログ記事などで whom of which が取り上げられ，この表現が「いかに間違ったものであるか」ということが議論されることも少なくないようである (Evile & Pesetsky 2023:5)．ここから，当該関係詞が偶発的なエラーによるものではなく「一つの (誤った) 用法」として人々に認知されていることがうかがえる．

本稿では，収集できた用例数などを鑑みて，分析対象は whom of which および whom which のみに限定する．なお Evile & Pesetsky (2023: 12) は whom of which 内の of の実現はオプションであるとしており，whom of which と whom which の差異については特に議論されていない．一方，筆者がウェブコーパス (iWeb: Davies 2018) を使用して行った調査では，whom of which は whom which に比べ 1) 主格で用いられる頻度が高く，2) 非制限用法の割合も高い，ということが確認できている．ここから，本稿では両者を性質の異なる関係詞として扱う．

3. 規範継承の失敗と新規範の創発

本稿では，whom (of) which の由来が関係詞 whom および (of) which の用法継承の失敗にあるという仮説を想定する．この仮説が正しいとすれば，例えば whom の第一言語習得期に得られる自然なインプットが近年減少していることが予想される．そこで，言語習得期の幼児と周囲の大人のやり取りを収めたデータベースである CHILDES (MacWhinney 2000) を用いて，幼児本人以外の発話における whom の使用率の年代比較を行った．具体的には，CHILDES (北米コレクション) の各コーパス毎に whom および who の用例数をカウントしその比率 (whom/who) を求め，年代については各ファイルに記録されている収録日の中央値を参照した．whom/who 比率を縦軸に，収録日の中央値を横軸に取った散布図を図 1 に示す．1970-80 年代では比較的 whom 率の高いデータが存在するが，90 年代以降はほとんど 1% 以下であることが分かる．またデータの断絶が見られる 1990 年以前と以降で whom の使用数，who の使用数を比較するクロス表を作成し，Fisher の正確確率検定で年代 (90 年以前 vs 以降)

と whom/who の過多の依存関係を「90 年以前に whom が多い」という対立仮説で検定したところ，p = 4.9995e-06 という極めて低い p 値が得られ，90 年以降・以前で whom の使用数が減少していることが統計的にも支持された．

加えて，現代アメリカ英語の大規模均衡コーパスである Corpus of Contemporary American English (COCA: Davies 2008) を用い whom および [名詞 + which]，[名詞 + of which] の 30 年 (1990 年-2019 年) の頻度変化を確認したところ，いずれも減少傾向にあり，whom については 2 割以上の減少，which に至っては半数以下となっていることが確認された．一方 of which については微減程度であり，ここから，whom および which の用法が継承されにくくなっているものの，関係詞としての which は「of と複合するもの」という印象が相対的に強化されている，という可能性が示唆された．

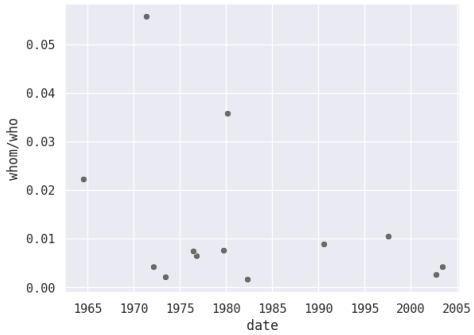

図 1. CHILDES 諸コーパスの whom/who 比率

ではなぜ，どのように whom (of) which という新奇関係代名詞が出現したのだろうか．きっかけとしては偶発的なエラーや誤解に基づくものだった可能性が否めないが，前述のように which が「of と複合するもの」という認識を強めており，かつ関係代名詞 which の用法が曖昧になっているとするなら，そこにさらに用法が不明な whom が結合したことにも一定の説明がつくかもしれない．

また，規範心理の研究で示されている，「よく知り顔」で行われた行動が「規範的なもの」として認識されるというメカニズムが whom (of) which の伝播に関連していると考えられる．ヒトは未知の道具の使い方を学ぶ際に，例え 1 度だけの観察であっても，使い方をよく知っている素振りで扱われた場合その使い方が「正しい」ものであると認識し，自らも模倣する傾向にある (Schmidt et al. 2010)．言語表現でも同様で，実際 whom (of) which はソーシャルメディア上で多数用いられているため，whom や (of) which の用法に自信のないユーザーが目にし，それを「正しい」用法 (規範) として取り込む機会は十分にあると考えられる．また不特定多数のユーザーが過去にも遡って何度でも当該の言語表現を閲覧できるというソーシャルメディアの特性も関係していると言えよう．

加えて， whom of which と競合すると考えられる関係代名詞 who，およびゼロ形 (∅) とのすみ分けを考える必要があるが，前述の通り whom of which は主格で用いられやすいことを考えると who と競合し，whom which は逆に目的格で用いられやすく，その意味で ∅ と競合するとみなせる．who は単音節で音韻的にも弱化する傾向にあり，∅ は形を持たないという点でどちらも「目立たない」要素である．ここから「目立たない機能語に対し代替となる新奇表現を用い注意を惹く」(e.g., by means of ⇔ with) という文法化を促すメカニズムである「目立ち (extravagance)」の原理 (Haspelmath 1999) が働いたと考えることが可能である．また iWeb コーパス (Davies 2018) のデータからは who と比較して whom of which が非制限用法での使用が多いことが示唆される．もちろん who の用例が圧倒的に多く whom of which が who に取って代わっているとは言えないが，一部のユーザーが非制限用法の際に選択的に whom of which を用いている可能性がある．whom which については “I have a boy friend/kinda like fiance whom which i’m completely in love with ...” といった，先行詞と呼応するギャップとの距離が長い用例が多く，このことが ∅ ではなく whom which という目立つ関係詞の使用を動機づけているとみなせるかもしれない．

4. 結語

以上本稿では whom, (of) which の関係詞用法という規範がうまく継承されず，両者が結合した新奇関係詞 whom (of) which が生まれ，ソーシャルメディアの特性やヒトの持つ規範心理・「目立ちの原理」といった諸原理も手伝い一定の範囲に伝播・定着し特定の条件下で再生産されるようになったと考える．とはいえ現状分析したデータ数が非常に少なく，推測の域を出ない部分も多々あるため，今後はデータを拡充し分析を深めていく必要がある．

参考文献

Davies, Mark. 2008-. *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*. Available online at https://www.english-corpora.org/coca/.

Davies, M. 2018. The *iWeb Corpus*. Available online at https://www.englishcorpora.org/iWeb/.

Evile, K., & Pesetsky, D. 2023. Wh-which relatives and the existence of pied-piping. *Glossa: A Journal of General Linguistics, 8*(1). https://doi.org/10.16995/glossa.9943

Haspelmath, M. 1999. Why is grammaticalization irreversible? *Linguistics, 37*(6), 1043–1068.

MacWhinney, B. 2000. *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk. Third Edition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Schmidt, M. F. H., Rakoczy, H., & Tomasello, M. 2010. Young children attribute normativity to novel actions without pedagogy or normative language. *Developmental Science, 14*(3), 530–539.